



第19号
平成2年4月
日本山岳会
北海道支部
札幌市中央区
北2条西10丁目
植物園グラウンド内
振替口座小樽9-16937番

利尻山と大塚君の七回忌

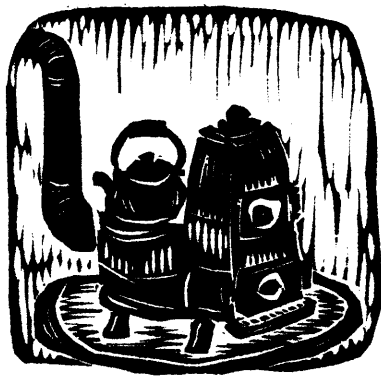
望月達夫

かれこれ三十年前のことである。前日に礼文岳に登って利尻島に戻ったところ、天気が下り坂で明日の利尻登山はむずかしそうになった。遙るばる東京から来た深田久弥さんは、一日でも二日でも待機して登るのだという。私は恰度、札幌へ転勤になってまだ二ヶ月余り、とりにくい休暇を無理してとったので、そう長く休むわけにはゆかない。利尻へくる機会なんてまだいくらもある筈と高をくくって、札幌在住の高澤光雄君とその日の午後に利尻島を離れた。昭和三十五年九月十四日の午後のことである。

それからはば三年札幌に在勤して、北海道の山を幾つか登らせて貰った。いい仲間がいたからである。が、とうとう利尻山へ登る機会を逸してしまった。本州へ帰ってから三回ほど北の山へ来たが、利尻山とはどうも縁がなくて過ぎた。北海道には利尻山以外にも、私の未踏の山でいい山がまだ少なからずあるのだが、この山へはできることなら登ってみたい。もう私もそんなに若くないから、うかうかしてはいられないと去年(平成元年)の春頃だったか、高澤君への便りに、誰方か夏にでも行く人があれば知らせて

くれないか、と頼んでおいた。たまに水科行雄さんが定年となって暇ができ、同行して下さるといふ。水科さんは、前に暑寒別へ登ったとき、私の雨具などを担いでくださった人なのでよく覚えていた。それでは、とお願ひしたら間もなく北海道支部有志の山行としての計画書が届いたが、聊か大袈裟になっただけで、一驚した。しかも、それからすぐ続いて行われる大塚前支部長の神威岳での七回忌供養山行が、支部の行事として決定していたので、それにも私が同行できるよう日取りをうまく按配して下さってあった。こうした一連のご配慮には、私個人として感謝のほかはなかったが、時期が恰度七月下旬という北海道観光と夏山の最盛期に当り、実の

ところ宿泊所や往復切符の手配には少なからず苦勞せざるを得なかった。しかし、折角の支部のご厚意なので、そんな勝手が言えた義理ではなく、何が何でも参加せねばと思っていた。



目次	
利尻山と大塚君の七回忌 望月 達夫	……(1)
北海道の山の標高 再検討について 五百沢智也	……(4)
キトウシヌプリの 山名について 及川 敬一	……(9)
及川敬一氏の急逝を悼む 高澤 光雄	……(10)
支部 日誌	……(11)
平成元年度海外研究の活動 海外研究委員	……(12)
カット 渋谷 正己	

私は、学生時代大塚君とよく登った佐々木誠君を誘った。彼は喜んで同行すると言ひ、奥さんと大雪山へ登ってから合流することになった。また、私の最近十五年間に一番同行回数が多い岡田昭夫君が加わったので、東京からは四人となった。

七月二十六日早朝、稚内で行十三名が顔を合わせたのだが、なかには昔、屢々北の山に同行した高澤君や石崎貞子さん、そのほかにも山での思い出のある水科リーダー、浅利欣吉、平野明、河村哲子さんらの方々がおられて、私の心は大きくふくらんだ。

乗船した宗谷丸は当然のことながら三十年前とはさま变りの大型船で、夜行できた私は暫く横になっていたが、頭のなかには昔の記憶がそこはかとなく浮沈した。あれから三十年の間には随分いろいろなことがあったが、当時同行した深田さんも袋一平さんも既に亡く、私の体力もこの二、三年大いに下降の一途を辿っていた。だから水科さんの厚意にあまえ、寝袋などの個人装備や行動食は携行したものの、今夜と明朝の食糧、炊きさん用の水、共同装備のテントなどは若い方のお世話になる筈であった。

空は晴れて海は静穏だったが、山

の上半は南西風が強いせいか山頂はかくれていた。杳形から登る計画を変更して、鴛泊からのコースを登った。山道は想像したようによく整備され、ゆっくり登ったが三時四十分には、一等三角点のある長官山の利尻岳小屋に着いた。ここは恰度、風の通路なのか、時どきよろけるような疾風が吹きぬけてゆく。担ぎあげたアルコールを楽しむ人も多く、コンビーフ入りのカレーライスの夕食が終って、下界のきらめく灯りを眺めたあと、風の音にも妨げられることなく、寝袋に入って熟睡することができた。

翌二十七日、昨日から同行してくださった利尻在住の河野象威さんを合せて十一名が山頂に向った。強風は依然おさまらず山頂は濃いガスに包まれていたが、小屋から約二時間で頂上の小さな神社の前で乾杯できたのは幸いだった。展望は霧に等しかったとはいえ、私は決して不満なぞ覚えなかった。半世紀以上も登っていたら、こういう山頂は幾らもあつたし、もっと惨憺たる頂きの記憶もあつた。眺望が得られればそれに越したことはないが、私は眺望のためにのみ登頂するわけではないから決して失望などしない。私が再びこの山頂に立つことなぞないと思え

ば、感慨もひとしおである。同行の方々のお蔭と、おのずから手をさしのべて感謝の気持を現わした。

小屋からの下りでは登りの時より眺望がきき、利尻島の北岸、鴛泊港や西の杳形がよく見えただけでなく、礼文島もはっきり姿を現わしていた。また路傍に咲いていたイワギキョウ、オトギリソウ、アキノキリンソウの花々を楽しむ心の余裕もできた。

鴛泊の民宿みさき荘に着いてから、まだ時間もあつたので数人の友とベシ岬の一等三角点(補点)まで登り、ポンモシリ島や荒涼とした北辺の海岸の景を楽しんだ。夜は当然のことにお世話になつた河野さん西谷米治さんをまじえて、遅くまで語り合つた。

離島する日は朝の快晴で、利尻山が全容を現わした。船上からも絵葉書そのままの姿で、永く私たちを見送ってくれた。

あの呪わしい戦争時代、昭和十七年九月下旬、私は小樽港からアリニーシャン列島キスカ島へ輸送船でおくられたのだが、稚内と利尻島の間を北進したとき初めて利尻山を仰ぎ見たのだった。その時の印象はいまも忘れがたいものがある。いま、利尻山に登り終えて旧友とたのしく

語りながらも、戦争で亡くなった多くの友を憶って、名状しがたい複雑な感情が胸中に去来するのを、いかんともなし得なかつた。

(註・利尻山については深田さんは『日本百名山』に利尻岳と表記している。敢て異をたてる訳ではないが、現地での一般的呼び方、地形図の表記に従つて私は、山を使つた。山小屋の表示だけが岳となつていたので、その通りにした。)

大塚武君の慰霊碑(レリーフ)のある神威山中に行つて、七回忌の供養をする支部の行事は、七月二十九日の昼過ぎに札幌出発ときまつていた。一行には利尻へ行った仲間も多く、その他に橋本支部長、山川、芳賀、小林、新妻、三浦さんらの旧知の友人も加わり、また嗣子謙一さん、実弟木村康宏さんも参加されて二十名近くになった。

大塚君のレリーフは一周三〇分程五十九年八月上司に、現地へ送られたが行われたのか(JAIC) 一七二七号及び「マニラ」一七二七号に記載されてゐる。三時三十分ごろに案内は行はず、また一様の山仲間からは誰も参加できずにいて、それが私の

心の負担になっていたため、今回は何としても行きたいと思っていた。幸い遭難当時私と共に札幌へ急行した佐々木君も一緒に行けたのは嬉しかった。ただ残念なのは、学生時代大塚君といちばんよく登った山田亮三君が、あたかも大塚君の後を追うように亡くなっていったことだった。

場所は元浦川ニシユオマナイ沢、上の二股で、曾て大塚君が神威岳へ登る前日の露营地のすぐ近くであるため、二十九日は宮林署の造林作業小屋に一泊することになった。夕食には河村皆子、木下恵子さんらが腕をふるわれた石狩鍋を賞味し、アルコール類も十二分にあつて、一同思い出話に過ぎた。

また浦河宮林署からも大塚君旧知の方二名がわざわざ参加されたうえ、小屋の清掃も行き届き、敷物まで新たにされていたのに一同感謝の言葉もなかった。

翌三十日は朝方の小雨もすぐ上つて陽光がさしてきた。最初の徒渉をしてから中ノ沢の出合までは、これも宮林署のご好意で旧い歩道の草刈がしてあったため、そこを歩くことができた。

九時半ごろにレリーフの前に到着し、一同黙禱ののち碑前で定められた簡素なご供養をして式を終つ

た。大塚君の没後、富士霊園の奥津城には勿論お詣りしていたが、私はここへ来て初めて、彼の霊と親しく向き合うような気持ちになった。

式が終わってから比較的若い人だけ十一名が神威の山頂に向った。私も神威岳はまだ登頂してないので、行きたい気持は強かったが、時刻が既に十時であり、いまの体力では到底若人と同じ早さでは登れないと思ひ、数名の友人たちと碑前に残ることになった。そして色々な話をしたり、造つて下さったソーメンを食べたり、寝ころんで空を眺めながら思ひに浸つたりした。

山のなか、奥深いところに生き支のレリーフを造るといふことは、いったいどういう意味があるのであろう。勿論、亡き人のまったくあずかり知るところではない。残された親しい仲間たちのその人を慕う気持ち凝縮し、それがおのずから発現した結果、とでも言うべきであろうか。

山なれない人には行けないような山懐深くに造られた大塚君のレリーフ——そこが或いは山仲間の最も好むところであるかも知れないが、これから先、年月の経過と共に彼を熟知していた友人たちも老いてくると、ここへ来ることさえなかなか困

難になりはしないだろうか。つまりレリーフの維持管理がむずかしくなりはしないか。

いや、そんな余計なことを考える必要はない。時が流れて、もう大塚のことも忘れられ、或いはレリーフさえも自然に風化してしまうかも知れないし、それが本当によいことなのかも知れない。人間が造つた形あるものなど、もともと大したものではないのかも知れない、などと私なりに勝手なことを考えたりした。

ことわつておくが、大塚君のレリーフを造つて下さった支部の方達の限りなく厚い友情に対しては、私個人として満腔の謝意を現わすに吝かではなく、だからこそこの行に参加したのもあった。だが、私自身が日頃、山の中に個人のレリーフを造るといふ行為に対して、一般論としては常に必ずしも肯定的になれない気持が、ふと現われてきたと言ふべきか。

ここで自説を繰りひろげるつもりはないので、これ以上は書かないが、金峰山麓金山平の木暮理太郎翁の讚碑をたてた当時のいきさつを、何かの折に読んでみていただきたい(『山岳』八十二年所収、小野幸氏の一文)。木暮さんの讚碑を譬えにひくのは、聊か的はずれの嫌いがあるにして

も、である。

私も、いまの年齢から言えば、この次来られるかどうか、また来たいとは思ふものの、どうなるか判らない、などと思ひながら去りがたい思いを残して、レリーフをあとにした。神威山頂から戻つた仲間と合流し、乗車する前に夫々お別れの言葉を交わして、ニシユオマナイ沢の車止めを去つたのは、既に七時をだいぶ回つたころであつた。

翌日、佐々木君と私は予定通り札幌を去つたのだが、利尻登山も大塚君レリーフ供養行も、予期した通り目的を達することができたのは、偏に支部会員各位のご配慮の賜と心からお礼の言葉を述べて筆をおく。

(一九九〇年一月)

